

## 高瀬舟／その他（森鷗外） 其の一

江戸時代中期、寛政年間の話である。遠島を云ひ渡された京都の罪人は高瀬川を下つて舟で大阪に運ばれたが、護送役の京都町奉行所の同心は、舟の中で罪人や見送りの縁者達から悲しい話ばかり聞かされるので、役目を大層嫌がつたものだった。

處が、或日の事、「これまで類のない、珍しい罪人が高瀬舟に載せられた」。喜助といふ名の、「弟殺しの罪人」だったが、護送役の同心羽田庄兵衛と一緒に舟に乗込んで、その様子を見てみると、どうにも「不思議」に思はれてならなかつた。喜助の顔が「いかにも楽しさうで、もし役人に對する氣兼ねなかつたなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌ひ出すとかし、さうに」さへ思はれるくらゐで、どう見ても島流しの罪人らしからぬ様子をしてゐたからである。

やがて庄兵衛は堪へ切れなくなつて、喜助に語りかけた。「どうも島へ往くのを苦にしてはゐない」様子だが、「一體お前はどう思つてゐるのだい」。すると喜助は「につこり笑つ」てか

う答へた。樂に暮して來た世間の人達にとつては遠島は悲しい事ではあるが、自分のやうに居心地のよい場所にゐた事が一度もなく、辛い目ばかりを見て來た人間にとつては、やつと落著く場所が出來て、「まづ何より難有ありがたい事」だし、それにまた、遠島の仕來りとして、牢を出る時、お上から二百文も頂いた。恥づかしながら、自分はこんな金子きんすを手にした事がないので、これを「島でする爲事しごとの本事もとでにしようと楽しんでをります」。

庄兵衛は「喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐること」に一驚いつきやうし、自分が暮しに「満足まんじつを覺えたことはほとんど無い」事に思ひ至り、自分には「どうも喜助のやうな心持にはなられさうにない」と考へざるを得なかつた。俺は身に病があれば病がなかつたらと思ひ、蓄たくはへがなければ少しでもあつたらと思ひ、蓄たくはへがあつても、もつと多かつたらと思ひ、「どこまで往つても踏み止まる」事が出來ないでゐる。だが、喜助は「今日の前で踏み止まつて見せてくれ」てゐる。庄兵衛は「驚異の目」を睜みはつて喜助を見た。喜助の頭から「毫光がうくわうが差すやうに思」はれた。庄兵衛は思はず「不穩當」な言葉遣ひをして、「喜助さん」と呼掛け、弟殺害の譯を訊ねた。喜助は幼い時に両親を亡くし、弟と助け合つて暮してゐたが、病に罹かつた弟が喜助一人に稼かせがせては濟たまないとして、剃刀かみそりで自殺を計り苦しんでゐる處に喜助が歸宅し、苦しみ

を見るに忍びず、乞はれる儘に喉から剃刀を抜いてやつたら、その場を人に見られてお繩になつたといふのであつた。

庄兵衛が喜助の頭から差すやうに思つた「毫光」といふのは、新潮國語辭典によれば、「佛の眉間の白毫びやくわうから出る光」の事で、要するに庄兵衛は喜助を佛様さながらに尊い存在と思つた譯だが、無論、さう思つたのは作者鷗外自身であつた。この「高瀨舟」を初めとして、鷗外は「妄想」、「カズイスチカ」、「寒山拾得かんざんじつとく」等の作品に於て、彼の理想人間像や、それに背馳はいちせざるを得ない己れの現實に對する自省や自嘲の念を繰返し描いてゐる。高橋義孝は「森鷗外」に於て、「高瀨舟」と「寒山拾得」とは「相互補足的」だし、喜助は「カズイスチカ」の花房醫學士や「妄想」の主人公とは「正反對の人物で、花房の翁に近い、いやその更に純粹なものだ」と書いてゐるが、これら「相互補足的」な作品群、即ち日夏耿之介の云ふ「高瀨舟物」に於て示される、「専念に道を求める人」に寄せる鷗外の眞情について、今回は二回に互つて少しく語つてみたいと思ふ。

〔山椒大夫・高瀨舟〕、「阿部一族・舞姫」、新潮文庫